

OB会だより

国臨協OB会関東信越支部

平成23年5月15日

NO 50 号

発行責任者 秦 政行

編集責任者 宮野勝秋

国臨協OB会関信支部事務局

柏市市大井893-8

TEL: 04-7193-0866

謹んで東日本大地震災害のお見舞いを申し上げます。一日も早く復旧されますことを心よりお祈りします。

第30回総会・懇親会告示 (開催日を延期)

会員各位

国臨協OB会関信支部
会長 秦 政 行

今年もいまや緑鮮やかな季節となりました、会員の皆様にはお元気でお過ごしのこととご推察申し上げます。

3月11日に発生した東日本巨大地震の被害により多くの尊い命が失われ、多くの住宅が被災されたことに謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。また被災を受けられた皆様とそのご家族に対し心からお見舞い申し上げます。東日本巨大地震は地震と津波以外にもいたる所に甚大な被害を及ぼした、特に福島原子力発電所は重大な事故により放射能漏れが長期化しています、東京電力の電力供給不足により計画停電が実施され、節電の長期化が予想されます。地震が発生して2か月が過ぎようとしています。テレビや新聞等ではいまだに悲惨な報道がされております、今回の巨大地震の凄まじさとむごさには驚いて心が痛む日々が続いております。

さて、例年行われているOB会関信支部総会

記

日 時 平成23年10月8日(土) 12時30分より
場 所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)JR市ヶ谷駅下車 徒歩2分
同封の地図参照

千代田区九段北4-2-25 電話03-3261-9921

懇親会費・年会費 9,000円 (懇親会費 6,000円, 年会費 2,000円, 義援金 1,000円)

・懇親会の開催について検討を余儀なくされ、OB会役員会議を開催して総合的に検討いたしました結果、6月1日(土)開催予定されておりましたOB会総会・懇親会の開催を延期とすることを決断いたしました、OB会員の皆様には大変申し訳れありませんが諸事情をご理解の上ご承知おき頂きたいと存じます。

なを、今年度に限り年会費を3000円とさせていただきます、その内1000円を義援金として被災地に支援したいと存じます、OB会関信支部会員の皆様宜しくご理解の上お願い申し上げます。

会員の皆様、総会・懇親会を下記の通り開催いたします、延期して季節は秋ですが、ぜひ都合をつけられて多数ご参加くださる様、お願い申し上げます、出欠につきましては同封のハガキにて9月10日(土)までに近況をお書き添えの上、ご返送される様お願いいたします。



デイサービスセンターに勤務して 元国立療養所栗生楽泉園 大野 清

1. はじめに

日本人の平均寿命は男性が 79.59 歳、女性が 86.44 歳 (2009 年) と長寿国になっています。しかし、年齢とともに病気がちな人も増えてきて、70 歳以上では 3 人に 2 人が病院通いをして、85 歳を過ぎると介護を必要な割合も 44 % に達すると言われています。

私は介護職員 (ヘルパー) として勤務していますので、デイサービスのしくみなどについて概要をご紹介します。

2. 介護保険制度について

介護保険は平成 12 年 4 月から始まりました。保険料は 40 歳以上の国民はその健康保険料に加えて所得から徴収し、65 歳以上は年金から天引きします。

利用したい場合は、市区町村に要支援や要介護の認定を申請し、それが認定されてはじめて利用できます。サービス利用分の 1 割を利用者 (介護の社会では利用者と呼称) が負担し、9 割は保険から支払われます。

なお、介護保険は点数ではなく、単位で表示して 1 単位の単価は 10 円を基本としています。

* 要支援・要介護度の目安

	心身の状態
要支援 1	日常生活がおおむね自分でできる
要支援 2	日常生活を送る能力は基本的にあるが、一部介助が必要
要介護 1	日常生活に何らかの介助が必要
要介護 2	日常生活になんらかの介助が毎日必要
要介護 3	日常生活が自分ではできない、毎日 2～3 回介助が必要
要介護 4	日常生活全般が困難であり、毎日 3～4 回介助が必要
要介護 5	日常生活全般にわたり、全面的な介助が必要

1) 在宅サービスには多くの種類のサービスがあります。

- ① ホームサービス (訪問介護)
- ② デイサービス (通所介護)
- ③ ショートステイ (短期入所生活介護)

この三つは「在宅介護の三本柱」と言われています。この三つを基本にさまざまな在宅サービスをうまく組み合わせて利用すれば、要介護の利用者も自宅で生活しやすくなります。在宅サービスは要介護認定で「要支援」以上に認定されると利用できます。

2) 施設サービスには

- ① 特別養護老人ホーム (介護老人福祉施設)
- ② 老人保健施設 (介護老人保健施設)
- ③ 療養型病床 (介護療養型医療施設)

利用者の状態に合わせて三種類の施設があります。

3. デイサービス（通所介護）について

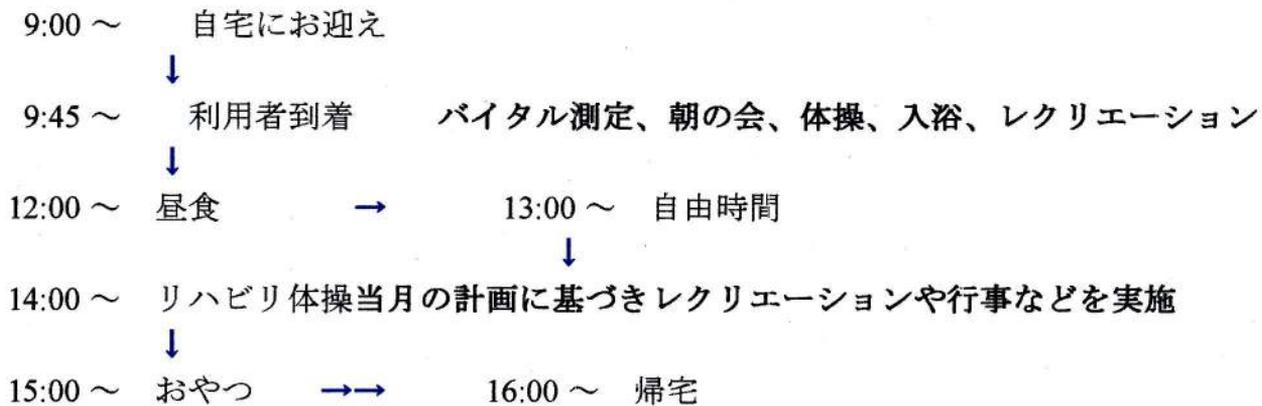
デイサービスは、介護保険では通所介護サービスとなりました。ケアプラン（ケアマネジャーが作成する介護サービス計画のこと）に基づいて、介護度により週1～5回程度、送迎、バイタル測定、入浴、食事、日常動作訓練、社会的交流、レクリエーションなどを提供します。

多くの人と会話をすることは刺激と緊張をもたらし、寝たきりの予防や認知症を和らげる効果があります。レクリエーションでは、主に四肢体感を動かしたり、机上で行うゲームや趣味、創作活動、音楽活動などを行います。

デイサービスは介護者（介護をしている人）にとっても必要な場になっています。週1回でも自分の時間があれば、気分転換にもなり介護者の共倒れを予防することも期待できます。

4. デイサービスの一日の流れ

当センターで行われている主な業務の流れをご紹介します。



5. 物忘れと認知症の違いについて

人間だれでも年をとれば身体的・精神的変化が進み、老化は自然の生理的過程としてあります。

	普通のもの忘れ	認知症のもの忘れ
*物忘れと認知症の違い	原因	脳の変化
	物忘れの範囲	体験全体を忘れる
	自覚症状	なし
	思い出せる?	思い出せない
	進行状況	進行する
	介護	必要あり

6. おわりに

当センターでは毎日30～35名前後の利用者が通っています。送迎から帰宅までスケジュールが組まれており、職員は利用者が「安全で安心」な環境で過ごせるよう努力しています。季節事の行事や誕生会・イベントもあり、私は「ハーモニカ」や「マジック」をしたり、自分で撮った自然風景やスナップなどの写真をお見せして喜ばれています。

医療から介護の社会へと仕事は移りましたが、どちらも「人」と関わる仕事ですので、違和感なく働くことができました。ますます高齢化していく社会で「介護」と「医療」は、一層密接で機能的に稼働することが求められています。

利用者とのコミュニケーションで心掛けていることは、知識や技術だけでなく、「笑顔と情熱」の心で接するように努めています。

7. 引用文献

- 1) 服部万里子：図解でわかる介護保険のしくみ。日本実業出版社。2010
- 2) 日本デイケア学会：高齢者デイサービス・デイケアQ&A。中央法規。2007

マタギ症候群(4)

藤川淳策

今は猟師の数が1970年代に比べて4分の1に減少しているという。全国でその数は10万人を割る。一方イノシシやシカによる農作物の被害額は増え続け年間220億円に達する。本誌にマタギ症候群(1)を執筆した頃の被害額は年間180億円といわれていたなのでその増加ぶりに驚く。

猟師減少の背景は高齢化や改正銃刀法による手続きの煩雑化。

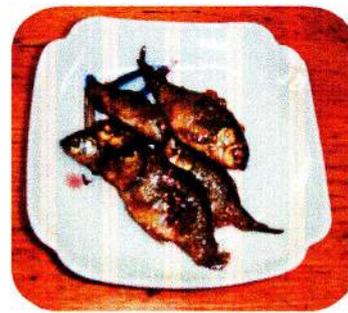
さらにライフル銃を所持するには、狩猟用の散弾銃を10年以上連続して所持し、無事故無違反、身辺調査等が伴う。もっとも有効射程10メートルからせいぜい20メートル程度の拳銃とは比較にならない強大な威力を有するライフル銃である。手続きの厳密化は当然だろう。

山村農作物の被害は深刻で自治体によっては陸上自衛隊の支援や、オオカミを放つ案すら浮上している。しかしイノシシやシカの天敵であるニホンオオカミはすでに絶滅した。人間が家畜の敵として滅ぼしてしまったのである。狩猟によって農作物の食害獣を駆逐するのはあくまで対症療法だ。被害を減少さす根本的な妙案はあるのだろうか。

秋も深まってくると持病のマタギ症候群の容態は一段と悪化してくる。今年(2010年)は11月15日の解禁日より1週間遅らして一路信州佐久に向かった。言わずと知れた病友の植園氏が同伴だ。

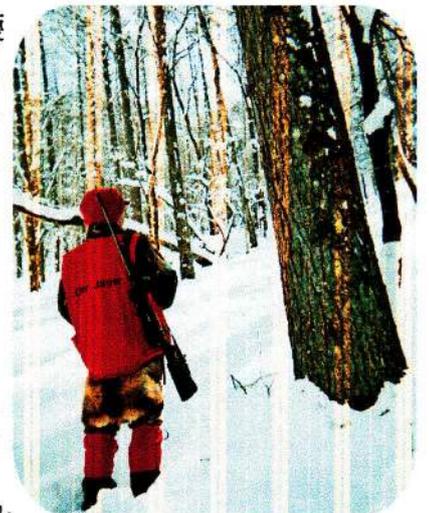
信州に行くのは単に病気療養のためだけではない。食の楽しみや紅葉などの大自然を満喫するためでもある。この時期、モミジなどの紅葉はやや盛りを過ぎているが、山全体が

オレンジ色に染まるカラマツの紅葉もすばらしい。また、旅館には泊まるが夕食はとらない。旅館の近くに年老いた双子の兄弟が経営するひなびた中華料理店がある。ここの餃子の味がすばらしい。植園氏と餃子をつまみに一杯飲むのが定番である。ありがたいのは、この店では信州佐久でしか食べることの出来ない酒の肴を出してくれる。それは地元の水田で採れた小フナの煮付け。佐久地方では水田にフナの稚魚を放ち、自然に育てる。稲刈りの手前の水抜きの前にこのフナを収穫する。これを各家庭が買い、それぞれの味付けで煮る。体調3センチ程の小フナは骨まで柔らかく、これを肴に地酒で一杯飲むと堪えられない。店の常連になり、地元の人と親しくなると思わぬ特典があるものだ。旅館に帰ってまた一杯。



翌朝は早めに起床して、しっかり朝食をとり身支度をして猟に出発だ。昼飯や飲み物などをコンビニ店で購入して猟師小屋に集合する。そこから各自自分の持ち場の立間(獲物を待つポイント)目指してそれぞれの車に分乗して分散出発する。この頃は症候群の病状が一段と強まり、気分が高揚するのを感じられずにはいられない。

今回の立間は獲物が来るかもしれない山の斜面を沢で挟んだ対面の山斜面だ。獣道が幾筋もあり、見通しもよい。絶好の立間といえよう。近辺を少し歩いて、立間として最適と思われる箇所の大さめのカラマツを背にして



と思われる箇所の大さめのカラマツを背にして

立つ。ライフルに強力な3006弾を3発込める。この弾は米軍などが使用しているM16系ライフルの対人用弾よりはるかに破壊力がある。これは獲物を半矢(ておい)にしないためである。

猟が始まって15分程経過しただろうか、猟犬の鳴き声はしないが、沢を挟んだ対面の右手斜面上部より獣の気配。鹿だ! 距離は70~80メートル。銃を肩に付けるが、立木と小藪が邪魔をして鹿の姿をスコープがとらえることができない。数秒後にこの獲物は視界から去った。逃してしまったのだ。隣の立間は植園氏だから射撃上手の彼が仕留めてくれるだろう。しかし銃声がしないと思っていると、先ほどの鹿が左手方面から小走りにやって来た。どうやら途中からこちらに引き返してきたらしい。スコープのクロスサイトが獲物の姿をとらえた瞬間に射撃。命中!

しばらくするとやはり先ほどと同じ右手斜面中断を鹿が小走りにやって来た。クロスサイトが獲物を捕らえる。射撃!命中!

この日3頭目の鹿がやはり対面の右手斜面からやって来た。射撃!命中!

12月29日の夜、佐久は冷え込んだ。例の爺さんの中華屋さんで植園氏と一杯飲んでいると雪が降り出した。この雪が夜半で止んでくれると明日は絶好の狩猟日となる。なぜかという、新雪が獲物の古い足跡を消してくれ、しかも雪が夜半で止むと、夜間に動いた獲物の新しい足跡だけが残るからである。実際そうだった。こうなると見切り(狩場の獲物の種類、数やその動向を判断すること)が簡単である。

朝、旅館を勇躍出発する。その際、獣の毛皮の腰当てを持参する。佐久の山中は気温がマイナス10度前後まで下がるので、この腰当てが無いと食事や休息の時に困る。丸腰樹の切り株などに腰をかけるとたちまち身体が冷えてしまう。これがあると雪の上に直接座

っても身体が冷えない。写真の右側が植園氏のもので左側が小生のものだ。

早朝の見切りで大きなイノシシの新しい足跡があったという。さあ、今日はイノシシだ。心が

はずむ。自分の受け持ちの立間においても獲物が大きなイノシシとなると、適度の緊張感はある。

猟が始まってしばらくすると勢子が大きなイノシシを止めたとの無線が入った。写真左側の体重100キロぐらいの獲物であった。

猟場を別の山に移して本日2回目の猟を行う。今度は大きな鹿の足跡。猟が始まってしばらくすると鹿ではなく大きなイノシシが出現し、立間と立間の間を切られたという。ライフルの弾を抜き、銃を袋にしまって急いで車に飛び乗り、イノシシが逃げた方向の山に先回りする。逃げたイノシシが出現する可能性が高い場所に立間を張り直す。小生は一番端だ。5分もしないで犬の鳴き声がしだした。緊張感は高まる。イノシシだ! 距離はおよそ30メートル。クロスサイトが獲物の正面を捕らえた瞬間、イノシシは右方向に急旋回し脇腹を見せた。その瞬間に射撃!命中!

体重150キロはあろうかという大物。男4人で4本足を持って、軽トラックの荷台に持ち上げることが出来なかった。

写真右の黒っぽいのがこの獲物である。

年内に捕れたイノシシは肉質が良く、油が載っている。旨い。



最後のメッセージ

～ 渡部健次さんを偲んで ～

鈴木 知恵子



昨年(平成22年)の11月22日、渡部さんの奥様からの「今朝亡くなりました」という声に、あまりにも急なことで、次の言葉が見つかりませんでした。丁度1週間前の15日に渡部さんと電話で話をしていたのです。現在の病状のこと、国際医療センター新棟のお披露目会に出席できないので息子さん達が写真を撮りに行き皆様方にお世話になったこと、そして、私達がお見舞いに伺うための日程、人数等々の話をしたあと、最後に、渡部さんが「今年一杯持たないかも知れないな」と言う言葉に、「そんな事を言わないで下さい」と言い、会話を終えたばかりだったのです。

平成19年暮れ、渡部さんからOB会役員の推薦をしたので宜しくと連絡を受けました。翌年、顔合わせの飲み会で一滴もお酒を口にしないで、具合が悪いのですかとたずねると「昨年秋、息子達に断酒を約束した」と言うのです。渡部さんの体調を気かけながらもそのまま散会となり、二ヶ月程過ぎた3月下旬、「慈恵医大で診察を受け、入院になるので旧東二の集まりには出られなくなりそうだ」と言うのです。入院に至った経緯を淡々と語る声に驚き、病状の深刻さを感じさせず、その時は、大変なことになったけれど初期の段階なのかも知れないと考えておりました。

4月上旬、治療が始まる前にある先輩と二人で最初のお見舞いに伺いました。当初は結核の疑いもあることから(その後、感染の疑いは晴れましたが)個室に入っており、元気な様子でしたが、かなりの量の胸水がバッグに溜まっているのを目にしました。

入院当初は渡部さん自身、あまり大げさに言わないでという気持ちが強かったことから、ご本人の了解を得て、近い人への連絡をはじめ出しました。

そして治療の合間にお見舞いに伺った折に川戸先生からセカンドオピニオンへの提案があり、青木先生の紹介を得て、余り待たずにがんセンター中央のセカンドオピニオン外来を受診され、現在の治療方針と大きく変わらないとの話から、引き続き、慈恵医大での入院加療を選択されたのです。治療の合間の診察であり、「副作用で食欲が減退していたけど、帰りには築地で鮭を食べ、美味しかった、食欲が出てきた」と話され、何か吹っ切れた様に元気な声をしていました。

多くの方が知ることとなった頃には、「今日は・・・さん達がお見舞いに来てくれて元気百倍になった、懐かしかった」等とメールが飛んでくるほど喜び、4クールの治療が終わった7月上旬には、退院後は通院治療をしながら、「これからは治療難民になる訳で何かの時のためと考えて、池袋の帯津クリニックに予約を取り、漢方治療も始めます」と言い、インターネットやTV等でいろいろな情報を集めてよく勉強もしていた様子でした。7月下旬には子供さんやお孫さん達に囲まれ、「3日程早い誕生日を祝ってくれた」ことをついでのようにメールの最後にしたためてあったり・・・。

こうして、最初の入院から始まった長い日々は、様々な副作用に悩みながらも冷静に、そして、ひたすら前向きに病と向き合い、生きることへの力強さがひしひしと伝わってきた時間でもありました。渡部さんの静かでありながら、大きな強さを感じていたわたしは、後日奥様にそう話をしたところ「それは、満州から大変な思いをして引き上げて来たひとですから、そのような強さはありません」と一言。

あの日、力を振りしぼって会話をし、そして、人間としての尊厳が失われはじめた時、とうとう力が尽きてしまったのだと理解しました。

長い苦しみから解放された今、天国で毎日、杯を酌み交わしていることでしょう。

～ 渡部健次先生を偲んで ～

元国立成育医療センター 上原 信夫



習志野病院時代の渡部先生と仲間達

渡部先生との出会いは昭和六十二年四月、国立松本病院から国立習志野病院への副技師長配置換え時に始まります。着任当時の研究検査科は多くの施設がそうであったように、狭く古びた各検査室で構成されておりました。そして毎年増え続ける検査件数対応と新しい検査導入、採血業務への参画などに診療・管理部門から期待が高まっていました。

先生は厚生省臨床検査技師協会会長を歴任しており、ご多忙ということは承知していましたが、検査科ではとてもお優しく、いつもにこやかに、血液検査を担当していました。なかでも骨髓像検査の大家である先生は、若手技師に丁寧にご指導されていた事が深く印象に残っています。



この度、改めて先生の教えや思い出を回想しつつ筆を取らせていただきました。

まず、業務終了後の検査科職員を交えた執筆しがたい楽しいひととき……。帰る方向が一緒でしたので、途中下車し新宿にもお供をさせていただきました。私の趣味である剣道についても洒脱な性格から、お酒が強くないと剣道は強くなれないぞと杯を重ねた事や、先生ご自身も大変お酒が好きだった「あの頃」が思い浮かびます。



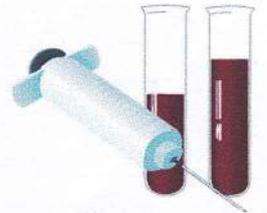
新宿でのひととき

そして、検査科廊下の壁や検査事務室壁のペンキ塗りを実施した事、先生も大粒の汗を流しながらの作業です。真っ白く綺麗になった壁と、顔についたペンキ、達成感ではち切れんばかりのスタッフの笑顔、心は明るく爽やかな気持ちは今でも忘れることができません。

その後、予算の厳しいなか検査室の壁を一部取り除き各検査室へ往来できる工事が始まり、業務の円滑と拡大に繋がるワンフロア化できたのは他部門からの絶大な信頼を先生が得ていた証です。身を持っての教えでした。

この再構築が起爆剤となり、技師の稼働エリアが一気に広がり業務拡大が進んだことはいまでもありません。さらに精鋭揃いの主任さん、若手技師のひたむきな努力で腫瘍マーカー、感染症検査、超音波検査など新規検査導入に取り組んでいったことを思い出します。

今では当たり前になっている外来採血業務ですが、当時はまだまだ技師による採血は少なかったように思います。外来診療業務の円滑・迅速化等に力添えしようということで、先生のご指導の下、検査科職員のエネルギー（念力）を引き出し外来検査室内に開設することが出来ました。私もスタート時から同じ採血台で一緒に採血業務に携わり、随分と苦労しましたが、患者さん接遇や他部門スタッフとの温かい交流を得たことは嬉しいことでした。



十数年の時を経て、新生児・乳児・小児採血を担当する機会がやってきました。手背、足背採血など、大変難しい採血方法です。それも先生のそばで数多く実務を経験したことが、役に立ちました。医師・患者さんから信頼される技術を得ていたことは習志野で培ったものです。感謝しております。次ページ続く

お知らせ

平成23年度

総会・懇親会の延期及び創立30周年記念事業中止について

東関東大地震により総会・懇親会を下記の通り延期としましたことをお知らせいたします。今年度の会費は下記の通りです。

日時:平成23年10月8日(土) 12:30~

場所:アルカディア市ヶ谷(私学会館)

尚、会費に値上げをお願い致しましたが平成23年度は義援金含む下記の通りです。

平成23年度年会費 3,000円

(義援金1000円含む)

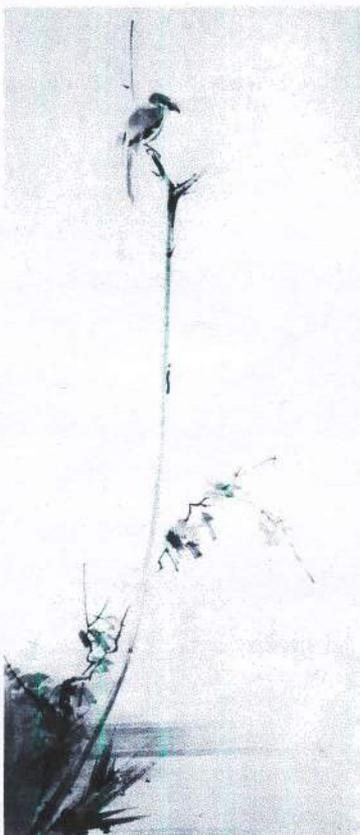
平成23年度総会・懇親会費 6,000円

前ページから続き

あの頃、渡部先生から宮本武蔵が晩年に記した五輪の書、『観見自在』の教えを自分のものにするにはまだまだ道遠ですが、これからも精進して行きたいと思っています。どうかこれからも草葉の陰から今迄通りお導きください。

最後になりましたが、先生のご冥福をお祈りいたします。

合掌



枯木鳴鶉図 和泉美術館蔵

訃報



川田 皖 義 さん
(元足利病院)

平成23年1月5日

謹んでご冥福をお祈りします。



編集後記

2011年3月11日未曾有の東日本大震災が。東日本大震災の大津波に流されなかった木造の建物あった。建築会社「シェルター」(山形市、資本金5千万円)を営む木村一義さん(61)が、「100年たっても大丈夫な木の建築を」と手がけた工法でつくった施設だった。津波に耐えたのは、宮城県南三陸町の歌津公民館と同県石巻市の北上総合支所。公民館は、周辺の建物のほとんどが流されたなかに、ぽつんと残る。支所はコンクリート部分と比べて、木村さんの工法をつかった木の部分は傷みが小さかったという。木村さんは大工の4代目として建築を学び、米国留学もした。木材と木材をつなぐ金具の工夫で、木の強さを引き出す「KES構法」と名付けた工法を編み出し、1974年に会社を起こした。柱の部分、つまり構造体だけの価格は、ふつうの木造より5~10%高くなる。リフォームの際に導入できる場合もある。建てた家が100年もてば、子ども、孫は住宅ローンから解放される。そんな発想で、81人の社員とともに木造の住まいを全国でつくり、中規模以上の建物には技術を提供してきた。95年の阪神大震災では、神戸市のある地域は壊滅的な被害を受けたが、KES構法でつくった3階建ての木造家屋は残った。震度7クラスまでの地震には自信があった。大津波には不安がよぎったものの流されなかった。「うれしかった。でも、多くの建物ががれきになり、たくさんの命が奪われた。複雑です」

2011.5.6 asahi.com より抜粋 (M・K)